

## 他児が泣いている場面における幼児の向社会的判断

越中康治

Preschoolers' prosocial judgments in situations in which other children are crying

Koji Etchu

本研究では、幼稚園の年中児及び年長児を対象として、場面想定法を用いた実験を行い、他児が泣いている場面を目撃したとき、幼児が、①泣いている他児を慰めるために向社会的判断を行うのか、②向社会的判断に際していかなる方略を生成するのか、③自ら生成した方略を実行することによって他児を慰めることができると肯定的に自己評価するのかを検討した。なお、幼児の向社会的判断及び自己評価に影響を及ぼす要因として、泣いている他児との親密性（高い、低い）を取り上げた。主要な結果を以下に記す。女兒は、親密性の低い他児に対して向社会的判断を行わない傾向があった。男児は、女兒に比して、泣いている他児を積極的に救助することで慰めようとする傾向があった。女兒は、年中では、他児を直接慰めると回答することが多いのに対して、年長では、他児を教師のところに連れて行き、教師に慰めてもらうと回答することが多かった。自己評価に関して、年中男児のみが、全般的に肯定的な評価を下した。また、年長女兒は、他児を教師のところに連れていくという方略を生成したときのみ、慰めることができると肯定的な評価を下した。

キーワード：幼児、向社会的判断、慰め行動、親密性

### 問題と目的

幼児の向社会的行動に関しては、これまで数多くの研究がなされてきた。向社会的行動の定義は未だ研究者間で一致していないが (Jackson & Tisak, 2001)、幼児を対象とした場合には、一般に、発達を考慮した上で、“動機を問わず、他者の困窮状態の認知やそれに伴う感情判断および感情推論によって生じる、他者に対するポジティブな行動” (岩立, 1995) などと緩やかに定義がなされ、研究が進められてきた。特に実験研究においては、実験的操作を行いやすい (岩立, 1995) という理由から、援助行動 (helping) 及び分与行動 (sharing) に関して多くの研究がなされてきている。

その一方で、援助行動及び分与行動などと比して研究がなされてこなかった行動がある。慰め行動 (comforting) もその一つである (Jackson & Tisak, 2001)。慰め行動は、“他者の気分をよくするための行為” (Jackson & Tisak, 2001) と幅広く定義されている。しかしながら、通常、慰め行動といえば、泣いている他児に優しい言葉をかけたり、泣いている他児をなでたりという行動が想定さ

れるであろう。このような他児を慰めるという行動は、保育所の0~1歳児クラスの幼児にも認められる(朝生・荻野・斉藤, 1988)。これらの行動は、幼児の思いやりの気持ちが表れた行動の典型であるといえるであろう。しかしながら、幼児の慰め行動は、援助行動や分与行動ほど頻繁には出現せず(Eisenberg-Berg & Hand, 1979)、実験的操作が分与行動や援助行動などを扱う場合と比べて難しくなる(岩立, 1995)ということもあつてか、あまり研究がなされてこなかった。それ故、幼児の慰め行動に関しては、明らかになっていない点が多い。

例えば、慰め行動は、一般的に女性が多く示す行動であるというステレオタイプがある。5年生を対象として、仲間指名法を使用して、向社会的行動を示しやすい級友を指名させた研究においては、慰め行動に関して、男子よりも女子が指名される傾向が見出されている(Zarbatany, Hartmann, Gelfand, & Vinciguerra, 1985)。しかしながら、実際のところ、慰め行動に関するこれまでの研究では、一貫した性差は見出されておらず、女兒が慰め行動を多く示すというのは、人為的につくり出された評判である可能性が指摘されている(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991)。性差に関してだけでなく、発達差、すなわち慰め行動が年齢とともに増加するかどうかについても、これまでの研究では一貫した結果が見出されてこなかった(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991)。

また、幼児を対象とした、これまでの慰め行動に関する実験研究では、友達が悲しんでいるという仮想場面を提示した上で、友達の気分をよくするためにどのような言葉をかけるかを質問するという方法がとられてきた(Jackson & Tisak, 2001)。しかしながら、他児を慰めるために幼児が用いる方略にはさまざまなものがあると想定される。ある幼児は、泣いている他児を積極的に救助することで、悲しい気分を鎮めてあげようとするかもしれない。また、ある幼児は、教師に知らせ、教師に慰めてもらうという方法をとるかもしれない。他者を慰め、他者の気分をよくするための行為というのは、一般に慰め行動と呼ばれる他者に情動的サポートを与えるような行為だけであるとは限らない。他児が泣いている場面において幼児が示す向社会的行動には、さまざまなものがあると想定される。

性役割期待の観点から、言葉をかけるなどして慰めることが女兒の特徴となりやすい行動特性であるのに対して、救助するという行為は一般的に男児の特徴となりやすい行動特性であると考えられる(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991)。また、Latané & Darley (1970)の研究を参考にすると、教師に報告し、教師に慰めてもらおうとするような迂回的な方略は、効果的ではあるものの、自らが直接的に慰めるという方略と比して、思いつくことが難しいのではないかと予想される。迂回的な方略は年長児でないと思いつかないという可能性もある。以上のことを踏まえると、他児を慰めるために幼児がいかなる方略を生成するかには、性差、発達差があるものと予想される。

さらに、幼児が他児を慰めるために向社会的行動を行うに至るまでの認知過程についても、明らかになっていない点が多い。一般的に、先に記したように方略を生成した後、方略を実行に移すまでには、生成した方略を評価する段階があると考えられる(Dodge & Feldman, 1990)。特に幼児や年少の児童の場合には、助けることができなと感じることによって援助行動が抑制されるといわれる(Eisenberg, 1992 二宮・首藤・宗方訳, 1995)。規範として向社会的行動を示さなければならないということを知っている場合でも、規範に従って行動するためには、自らが生成した方略及びそ

れを実行する自らの能力を、肯定的に自己評価できなければならない(Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991). 以上のことを踏まえると、他児を慰めるために幼児がいかなる方略を生成するかということに加えて、自ら生成した方略を幼児が効果的であると評価するのかということを検討することも重要であると考えられる。しかしながら、このような点を検討した研究もあまりなされていないのが現状である。

そこで本研究では、幼稚園の年中児及び年長児を対象として、場面想定法を用いた実験を行い、他児が泣いている場面を目撃したとき、幼児が、①泣いている他児を慰めるために向社会的行動を示そうとするのか(向社会的判断を行うのか)、②向社会的判断に際していかなる方略を生成するのか、そして、幼児が、③自ら生成した方略を実行することによって他児を慰めることができると肯定的に自己評価するか否かを検討する。なお、本研究においては、向社会的判断という語を、伊藤(1997)に従って、向社会的行動出現過程の一部に位置するものととらえられる、他者の困窮状態に際してどうするべきかについての判断を意味するものとして使用する。

本研究の主な予想は以下の通りである。まず、幼児が他児を慰めるという向社会的判断を行うか否か及び他児を慰めることができると肯定的に自己評価できるか否かに関する予想である。先行研究から、性差に関する予想を立てることは難しい。しかしながら、発達差に関しては、年中児よりも年長児が、向社会的判断を行う割合及び肯定的自己評価を行う割合が高いものと予想される(予想1)。次の予想は、向社会的判断において、いかなる方略を生成するかに関するものである。女児は、泣いている他児に対して言葉をかけるなどして慰めることが多いのに対して、男児は他児を積極的に救助することによって慰めようとする傾向があるものと予想される(予想2)。さらに、発達差に関して、幼児は、発達に伴い、迂回的な方略を生成することができるようになるのではないかと予想される(予想3)。

さらに、本研究では、向社会的行動の状況的規定因の一つである受益者との親密性についての検討も行う。菊池(1983)は、向社会的行動に関して、日本独自の変数を扱う研究の必要性を述べ“ウチの人には援助しソトの人には冷淡な日本人”という仮説を示唆した。それ以降、向社会性と他者との親密性に関する研究が多くなされ、それらの研究の多くが、親密性が高いことが向社会的行動の傾向を強めるという結果を示している(レビューとして杉森, 1996を参照)。幼児に関する同様の研究は少ないが、保育室内における向社会的行動のほとんどが、よく遊ぶ数人の仲間を対象にしたものである(Eisenberg, 1992 二宮・首藤・宗方訳, 1995)ことを考慮すると、幼児も、泣いている他児との親密性が高い場合に、他児を慰めたいという動機づけが強まるものと予想される(予想4)。

また、親密性が及ぼす影響には性差があることが予想される。小学校5年生を対象として、仲間に対する親和性の発達と向社会性の発達との関係について検討した堂野(1999)は、児童の向社会的行動の対象がクラスの友だちである場合と友だち以外の他者一般である場合とを比較している。その結果、男子は、仲間に対する親和性の高低にかかわらず、友達に対しても他者一般に対しても、同じ程度に向社会的であった。しかしながら、女子は、仲間に対する親和性が高い場合には、友達に対しても他者一般に対しても同程度に、男子以上に向社会的であったが、仲間に対する親和性が

低い場合には、友達に対しては男子以上に向社会的であるが、他者一般に対しては男子よりも向社会的でないことが明らかにされた。この結果を参考にすると、幼児の場合にも、女兒の中には、親密でない他児に対しては向社会的にふるまわない者もいることが予想される(予想5)。本研究では、児童と同様の性差が幼児にも認められるか否かについても検討する。

## 方 法

### 参加者と実験計画

宮城県内の幼稚園の年中児 35 名(男児 18 名, 女児 17 名), 年長児 32 名(男児 17 名, 女児 15 名)を参加者とした。実験計画は  $2 \times 2 \times 2$  の要因計画であった。第 1 の要因は参加者の性別(男児, 女児), 第 2 の要因は参加者の年齢(年中児, 年長児), 第 3 の要因は物語場面の登場人物との親密性(高い, 低い)であった。第 3 の要因のみ被験者内要因であった。

### 材料

高親密場面(物語場面の登場人物と参加者の親密性が高い)及び低親密場面(物語場面の登場人物と参加者の親密性が低い)を提示するための紙芝居を作成した。高親密場面と低親密場面の内容は、いずれも登場人物が椅子につまずいて転んで泣き出してしまうというものであった。紙芝居は両場面共通のものであったが、提示する際、高親密場面の登場人物は、後の手続きの中で参加者が指名した同じ組の仲の良い同性の幼児、低親密場面の登場人物は、架空の人物(参加者と同性で同じ年の、参加者が見たことのない知らない幼児)とした。なお、紙芝居は、登場人物が男の子である男児用と、登場人物が女の子である女児用から構成された。紙芝居は A4 の大きさであった(材料の詳細は付表を参照)。

### 手続き

幼稚園の一室において個別に面接方式で実施した。1 人の実験時間はおよそ 15 分であった。実験者と参加者とのやりとりはテープに録音された。実験に際して、参加者に、同じ組の仲の良い同性の幼児を一人指名するように求めた。参加者に、高親密場面と低親密場面を紙芝居で提示した上で、それぞれの場面について以下の質問を行った。なお、各場面の提示順序はカウンターバランスを行った。

(1) 向社会的判断に関する質問 参加者に「こんな時、〇〇ちゃん(参加者)は、××ちゃん(登場人物)にどうしてあげようと思う」と質問した。「助けてあげる」「慰めてあげる」等の回答が得られた場合は、更に、「どうやって助ける」「どうやって慰める」などと質問し、具体的な方略を生成するよう求めた。併せて、分析の補助資料とするために、「どうしてそう思うのかな」「どうしてそうしようと思うのかな」などと質問し、理由づけを求めた。

(2) 自己評価に関する質問 参加者に「〇〇ちゃん(参加者)がそうしてあげたら、××ちゃん(登場人物)は、痛いのが治ったり泣き止んだりするかな、それともしないかな」と質問し、向社会的判断に際して自らが生成した方略を実行することによって、他児を慰めることができるか否かを自己評価するよう求めた。

## 結果と考察

### 向社会的判断率と肯定的自己評価率

参加者が向社会的判断を行った割合（向社会的判断率）及び参加者が向社会的判断を行い且つ慰めることができると肯定的に自己評価した割合（肯定的自己評価率）を Table 1 に示す。

Table 1  
向社会的判断率及び肯定的自己評価率

性別 年齢 親密性	男児				女児			
	年中児 (N=18)		年長児 (N=17)		年中児 (N=17)		年長児 (N=15)	
	高い	低い	高い	低い	高い	低い	高い	低い
向社会的判断率	88.9%	77.8%	82.4%	82.4%	82.4%	64.7%	86.7%	66.7%
肯定的自己評価率	83.3%	77.8%	58.8%	58.8%	52.9%	47.1%	60.0%	53.3%

まず、年齢の要因を無視して、性別と親密性が及ぼす影響を検討した。向社会的判断率について、角変換値に基づく 2 (性別) × 2 (親密性) の分散分析を行った。その結果、親密性の主効果に傾向差が認められ、幼児が、親密性の低い他児よりも、親密性の高い他児に対して向社会的判断を行う傾向があることが明らかとなった ( $\chi^2(1)=2.92, p<.10$ )。肯定的自己評価率について、角変換値に基づく 2 (性別) × 2 (親密性) の分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり、女児よりも男児が、泣いている他児を慰めることができると肯定的に自己評価していることが明らかとなった ( $\chi^2(1)=4.00, p<.05$ )。

次に、年齢差を検討するために男女別に分析を行った。男児の向社会的判断率について、角変換値に基づく 2 (年齢) × 2 (親密性) の分散分析を行ったが、主効果、交互作用とも有意ではなかった。さらに、男児の肯定的自己評価率について、角変換値に基づく 2 (年齢) × 2 (親密性) の分散分析を行った。その結果、年齢の主効果が有意であり、年長児よりも年中児が、泣いている他児を慰めることができると認識していることが明らかとなった ( $\chi^2(1)=4.06, p<.05$ )。

女児の向社会的判断率について、角変換値に基づく 2 (年齢) × 2 (親密性) の分散分析を行った。その結果、親密性の主効果に傾向差が認められ、女児が、親密性の低い他児よりも、親密性の高い他児に対して向社会的判断を行う傾向があることが明らかとなった ( $\chi^2(1)=3.21, p<.10$ )。さらに、女児の肯定的自己評価率について、角変換値に基づく 2 (年齢) × 2 (親密性) の分散分析を行ったが、主効果、交互作用とも有意ではなかった。

以上の結果から明らかであるように、発達に伴い、向社会的判断率及び肯定的自己評価率が高まるという本研究の予想 1 は支持されなかった。向社会的判断率に関して発達差は認められず、肯定的自己評価率に関しては、男児の場合には、年長児よりもむしろ年中児の方が高かった。

しかしながら、女児の中には、親密性の低い他児に対して向社会的判断を行わない者もいることが明らかとなり、他児との親密性が及ぼす影響に関しては予想 4 及び予想 5 を支持する結果となった。なお、特に年長女児は、親密性の高い他児に対して向社会的判断を行っているにもかかわらず、

親密性の低い他児に対しては意図的に向社会的判断を行うことを避ける傾向があった。具体的には、実験者とのやりとりにおいて、「助けない。(「どうして?」という実験者の問いに対して) 名前がわからないから」「(泣いている他児を) 怒る。(「どうして?」) 名前がわからないから」「知らんぷりする。(「どうして?」) そのうち先生が来るから」などと、親密性の低い他児に対してはやや冷淡ともとれる回答がなされた。

#### 各方略の生成率

向社会的判断に関する質問において、参加者が生成した方略は、自ら直接慰めようとする「慰め方略」(『大丈夫?』っていう」「よしよししてあげる」など) 及び「救助方略」(「転んでいる他児を) 起こしてあげる」「ばんそうこう貼ってあげる」など)、そして、迂回的な方略である「教師依存方略」(「先生に言う」「先生のところに連れて行ってあげる」など) の3つに大別された。なお、参加者の中には、『大丈夫?』って言って、先生のところに連れて行ってあげる」など2つの方略を生成した者もいた。このように複数回答がなされた場合は、参加者が、慰め方略と教師依存方略の2つを生成したものとしてカウントした。このカテゴリー化について、筆者と教育学部の学部生の2人が独立に判定したところ、判定の一致率は94.6%であった。判定が不一致であったものについては評定者間で話し合い、その結果を分析に用いた。参加者が各方略を生成した割合を Table 2 に示す。

Table 2  
各方略の生成率

性別 年齢	男児				女児			
	年中児 (N=18)		年長児 (N=17)		年中児 (N=17)		年長児 (N=15)	
親密性	高い	低い	高い	低い	高い	低い	高い	低い
慰め方略	38.9%	38.9%	47.1%	47.1%	58.8%	41.2%	33.3%	26.7%
救助方略	16.7%	16.7%	17.6%	17.6%	5.9%	5.9%	6.7%	6.7%
教師依存方略	38.9%	22.2%	29.4%	29.4%	17.6%	17.6%	46.7%	40.0%

親密性の要因は被験者内要因であったこともあり、各方略の生成率に影響を及ぼさなかった。そこで、以下では親密性の要因を無視して分析を行った。まず、各方略の生成率について個別に分析を行った。

慰め方略が生成された割合について、角変換値に基づく2(性別)×2(年齢)の分散分析を行った。その結果、年齢と性別の交互作用に傾向差が見られたので( $\chi^2(1)=2.74, p<.10$ )、単純主効果の検定を行ったところ、女児における年齢の効果に傾向差がみられ( $\chi^2(1)=2.82, p<.10$ )、年中女児と比して、年長女児が慰め方略を生成しない傾向があることが明らかとなった。

救助方略が生成された割合について、角変換値に基づく2(性別)×2(年齢)の分散分析を行った。その結果、性別の主効果が有意であり( $\chi^2(1)=3.96, p<.05$ )、女児よりも、男児が救助方略を生成することが多いことが明らかとなった。

教師依存方略が生成された割合について、角変換値に基づく2(性別)×2(年齢)の分散分析を行った。その結果、年齢と性別の交互作用に傾向差が見られたので( $\chi^2(1)=2.99, p<.10$ )、単純主効果の検定を行ったところ、女兒における年齢の効果が有意であり( $\chi^2(1)=5.55, p<.05$ )、年中女兒と比して、年長女兒が教師依存方略を生成することが多いことが明らかとなった。

次に、慰め方略、救助方略及び教師依存方略の生成率を比較した。まず、年齢差を無視して、角変換値に基づく2(性別)×3(方略)の分散分析を行った。その結果、方略の主効果が有意であったので( $\chi^2(2)=35.85, p<.01$ )、ライアン法による多重比較を行ったところ、全体として、救助方略よりも教師依存方略が( $\chi^2(1)=14.81, p<.01$ )、教師依存方略よりも慰め方略が( $\chi^2(1)=4.20, p<.05$ )が生成される割合が高いことが明らかとなった。

さらに、年齢差を検討するために男女別に分析を行った。男児について、角変換値に基づく2(年齢)×3(方略)の分散分析を行った。その結果、方略の主効果が有意であったので( $\chi^2(2)=11.89, p<.01$ )、ライアン法による多重比較を行ったところ、救助方略よりも慰め方略が生成される割合が高いことが明らかとなった( $\chi^2(1)=11.88, p<.01$ )。また、救助方略よりも教師依存方略が生成される割合が高い傾向がみられた( $\chi^2(1)=3.37, p<.10$ )。

女兒について、角変換値に基づく2(年齢)×3(方略)の分散分析を行った。その結果、方略の主効果( $\chi^2(2)=25.35, p<.01$ )及び年齢と方略の交互作用( $\chi^2(2)=7.72, p<.05$ )が有意であった。方略の主効果についてライアン法による多重比較を行ったところ、救助方略よりも慰め方略( $\chi^2(1)=23.33, p<.01$ )及び教師依存方略( $\chi^2(1)=13.19, p<.01$ )が生成される割合が高いことが明らかとなった。年齢と方略の交互作用について、単純主効果の検定を行ったところ、教師依存方略における年齢の効果が有意であり( $\chi^2(1)=5.26, p<.05$ )、年中児よりも年長児が教師依存方略を生成する割合が高かった。また、年中児における方略の効果( $\chi^2(2)=18.87, p<.01$ )及び年長児における方略の効果( $\chi^2(2)=14.20, p<.01$ )が有意であった。年中児における方略の効果についてライアン法による多重比較を行ったところ、年中女兒は、救助方略( $\chi^2(1)=18.27, p<.01$ )及び教師依存方略( $\chi^2(1)=7.90, p<.01$ )よりも慰め方略を生成する割合が高かった。年長児における方略の効果についてライアン法による多重比較を行ったところ、年長女兒は、救助方略よりも慰め方略( $\chi^2(1)=6.54, p<.05$ )及び教師依存方略( $\chi^2(1)=13.51, p<.01$ )を生成する割合が高かった。

以上の結果から、全体として、幼児は泣いている他児に対して慰め方略を生成することが最も多く、ついで教師依存方略、そして、救助方略を生成することは比較的少ないことが明らかとなった。救助方略を生成する幼児は比較的少なかったものの、女兒よりも男児が救助方略を生成する割合が高いというのは予想通りの結果であり、性役割期待に沿った回答がなされたといえる。しかしながら、慰め方略の生成率に関しては性差が認められず、女兒では、年中児と比して、年長児の生成率がむしろ低くなっており、本研究の予想2は一部支持されなかった。また、教師依存方略の生成率に関して、男児では発達差は認められなかったが、女兒では年中児よりも年長児の生成率が高く、予想3は一部支持されたといえる。

なお、教師依存方略は、さらに、他児が泣いていることを教師に報告するというものと、他児を教師のところに連れて行くというものの2つに大別された。二項検定(両側検定)を行った結果、

年長女兒は、単に報告するという方略よりも、自ら教師のところへ連れて行くという方略を生成することが多かったが (1 vs. 12,  $p < .01$ ), 年中男児 (5 vs. 6, n.s.), 年長男児 (6 vs. 4, n.s.) 及び年中女兒 (4 vs. 2, n.s.) ではそのような傾向は認められなかった。

#### 各方略を生成した幼児の自己評価

親密性の要因を無視して、各方略を生成した参加者が、他児を慰めることができると肯定的に自己評価したか、慰めることができないと否定的に自己評価したかについて分析した (Table 3 参照)。

Table 3  
各方略を生成した幼児の自己評価

性別 年齢	男児				女兒			
	年中		年長		年中		年長	
自己評価	肯定的	否定的	肯定的	否定的	肯定的	否定的	肯定的	否定的
慰め方略	14	0	12	4	12	5	6	3
救助方略	6	0	5	1	2	0	0	2
教師依存方略	10	1	5	5	3	3	12	1

二項検定(両側検定)の結果から、男児に関して、年中男児は、慰め方略 ( $p < .01$ ), 救助方略 ( $p < .05$ ), 教師依存方略 ( $p < .05$ ) のいずれを生成した場合も、他児を慰めることができると肯定的に自己評価しているのに対して、年長男児は、慰め方略を生成した場合には肯定的に自己評価する傾向が認められたが ( $p < .10$ ), 救助方略及び教師依存方略を生成した場合の自己評価は必ずしも肯定的なものとはならなかった。また、女兒に関して、年中女兒は、慰め方略、教師依存方略のいずれを生成した場合にも自己評価が肯定的なものとはならなかった。しかし、年長女兒は、慰め方略を生成した場合の自己評価は肯定的なものとはならなかったが、教師依存方略を生成した場合には、他児を慰めることができると肯定的に自己評価していた ( $p < .01$ )。

以上の結果から、年中男児は、どのような方略を生成するかにかかわらず、他児を慰めることができると肯定的に自己評価していることが明らかとなった。しかし、年長男児の評価が必ずしも肯定的なものではないことを考慮すると、男児の場合、年中時には慰めることができるという自信をもって他児に働きかけるが、年長になるにつれ、自らの向社会的行動によって他児を慰めることの困難さに気づき始めるのではないかと考えられる。それに対して、女兒は、年中時で既に、他児を慰めることの困難さに気づいているのではないだろうか。そして、年長になるにつれ、教師の力を借りれば慰めることができるということを十分に認識するようになり、他児を教師のところへ連れて行くという方略を生成するようになっていくものと考えられる。

#### 全体的考察

本研究の結果から、泣いている他児を慰めるために、幼児がどのような向社会的判断及び自己評価を行うかに関して、性差、発達差、親密性が及ぼす影響の差があることが明らかにされた。男児



に関しては、慰め方略の生成率が女兒と同程度であることに加えて、女兒に比して、泣いている他児を積極的に救助することで慰めようとする傾向があった。また、男児は、親密性の高低にかわりなく向社会的判断を行っていた。男児は、女兒よりも、向社会的行動を示すべきであるという規範意識が強いのかもしれない。本研究の結果は、男児より女兒が向社会的であるというステレオタイプに反するものとなった。しかしながら、実験場面における回答の傾向が、男児の実際の向社会的行動のあり方をどの程度反映しているかに関しては今後さらに検討していく必要がある。年中では著しく高い肯定的自己評価率が、年長では低くなっている点などを考慮すると、実際の園生活の中で、男児は特に他児を慰めることの困難さに直面しているのではないかとも考えられる。

一方、女兒に関しては、年中では、性役割期待を反映してか、慰め方略の生成率が高いのに対して、年長では慰め方略の生成率が低くなり、代わりに、他児を教師のところに連れて行くという方略を生成するという傾向が認められた。泣いている他児に付き添い、教師のところへ連れて行くというのは、教師への報告と同様に迂回的方法であるとはいえ、より仲間関係の維持に配慮した方略であると考えられる。実際場面においては最も有効な方略であるのかもしれない。女兒が向社会的であるというステレオタイプがあるのは、女兒が使用する方略が、男児の使用する方略以上に洗練されたものであることによるのかもしれない。

その一方で、本研究では、年長女兒の中には、親密性の低い他児に対して向社会的行動を示すことを意図的に避ける者がいる可能性が示唆された。女兒は、男児に比して、“ウチの人には援助しソトの人には冷淡”（菊池，1983）なのであろうか。向社会的判断の際の理由づけに関しても、年長女兒の回答は特徴的なものであった。アイゼンバーグの向社会的な理由づけの水準（Eisenberg, 1992 二宮・首藤・宗方訳，1995）を参考にして、幼児の理由づけを概観してみると、全体としては、相手の要求に関心を示している“要求に目を向けた指向”及び同情的な応答である“自己反省的な共感指向”に分類されるような理由づけが殆どであった。具体的には、「痛そうだから」「かわいそうだから」慰めてあげるという理由づけが非常に多かった。これは、先行研究（宗方・二宮，1985）と一貫する傾向であった。しかしながら、親密性の低い他児に対して向社会的判断を行った年長女兒の中には、「（泣いている他児が）女の子でやさしそうだから」というような“快楽主義的・自己焦点的指向”に分類される回答をする者もいた。

年長女兒の理由づけのこうした傾向を踏まえると、少なくとも、女兒は、相手が既知の友達でなくても、その子と仲良くなりたいと思っている場合には、向社会的にふるまうものと考えられる。この点を考慮すると、堂野（1999）の研究から示唆されるように、特に女兒の向社会的性を育むにあたっては、仲間全般に対する親和性を高めることが重要になるものといえる。

## 引用文献

- 朝生あけみ・荻野美佐子・斉藤こずゑ 1988 0~1才児クラスにおける子ども同士のいざこざ 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 290-291.
- Dodge, K.A., & Feldman, E. 1990 Issues in social cognition and sociometric status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 119-155.

- 堂野恵子 1999 小学生の向社会的性の発達における共感性および仲間に対する親和性の効果 安田女子大学大学院博士課程完成記念論文集, 167-177.
- アイゼンバーグ N. 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子(訳) 1995 思いやりのある子どもたち 向社会的行動の発達心理 北大路書房  
(Eisenberg, N. 1992 *The caring child*. New York: Harvard University Press.)
- Eisenberg-Berg, N., & Hand, M. 1979 The relationship of preschoolers' reasoning about prosocial moral conflicts to prosocial behavior. *Child Development*, **50**, 356-363.
- アイゼンバーグ N.・マッセン P. H. 菊池章夫・二宮克美(訳) 1991 思いやり行動の発達心理 金子書房  
(Eisenberg, N., & Mussen, P. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. New York: Cambridge University Press.)
- 伊藤順子 1997 幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割 発達心理学研究, **8**, 111-120.
- 岩立京子 1995 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ—帰属要因と感情要因の検討— 風間書房
- Jackson, M., & Tisak, M. S. 2001 Is prosocial behaviour a good thing?: Developmental changes in children's evaluations of helping, sharing, cooperating, and comforting. *British Journal of Developmental Psychology*, **19**, 349-367.
- 菊池章夫 1983 向社会的行動の発達 教育心理学年報, **23**, 118-127.
- ラタネ・ダーリー 竹村研一・杉崎和子(訳) 1997 [新装版] 冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学— プレーン出版  
(Latané, B., & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Meredith Corporation.)
- 宗方比佐子・二宮克美 1985 プロソーシャルな道徳的判断の発達 教育心理学研究, **33**, 157-164.
- 杉森伸吉 1996 共感性と向社会的行動 児童心理学の進歩, **35**, 158-192.
- Zarbatany, L., Hartmann, D. P., Gelfand, D. M., & Vinciguerra, P. 1985 Gender differences in altruistic reputation: Are they artifactual? *Developmental Psychology*, **21**, 97-101.

## 謝 辞

本研究は、平成12年度宮城教育大学教育学部に提出された卒業論文の一部を加筆・修正したものである。本研究を行うにあたり、ご指導を賜りました宮城教育大学教育学部白石敏行助教授に心よりお礼申し上げます。また、本研究を行うにあたり、ご協力いただきました宮城教育大学附属幼稚園の諸先生方と園児の皆さんに心よりお礼申し上げます。また、本研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました広島大学大学院教育学研究科前田健一教授に心よりお礼申し上げます。

(指導教官：前田健一)

## 付 表

高親密場面：〇〇ちゃん（参加者）は、△△組（参加者が所属する組）のお部屋にいます。すると、同じ△△組の××ちゃん（参加者が指名した幼児）が、お部屋に入ってきました。××ちゃんは、お部屋に入ってくると、椅子にぶつかって転んでしまいました。とても痛そうです。大きな声で泣いています。

低親密場面：〇〇ちゃんは、△△組のお部屋にいます。すると、見たことのない、知らない、〇〇ちゃんと同じくらいの年の男の子/女の子が、お部屋に入ってきました。男の子/女の子は、お部屋に入ってくると、椅子にぶつかって転んでしまいました。とても痛そうです。大きな声で泣いています。

本研究で使用した紙芝居

